

## 文藝批評家としての劉?

著者	飯田, 御世吉郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	100
ページ	50-60
発行年	1903-06-25
その他の言語のタイトル	文芸批評家としての劉?
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5676">http://hdl.handle.net/2298/5676</a>

、蘭茸と寛大と同一視せらる。蓋し世には極端と極端と同一點に歸することもあれば、前掲の如き反對の相一致するも怪むに足らざるが如し。嗚呼直に是れ奇なる事相にあらずや。

○大通と大塞と

有<sub>二</sub>大通、必有<sub>二</sub>大塞、無<sub>二</sub>奇遇、必無<sub>二</sub>奇窮、

社會萬端の事、勝ちて兜の緒を緊むる心掛けあらば、功焉を傲るべけんや。窮も亦敢て悲むに足らざるなり。彼の徒に小功を得て得々たり、小窮に遭ひて絶望落膽、措置する所を知らざるが如き徒輩、寧ろ大に之を憐むべきにあらずや。

文藝批判家としての劉勰

飯田御世吉郎

(一) 劉勰以前文藝批判

支那に於ける文藝批判の源頭に遡つて遙く先秦時代を摸索するに、易に修辭立誠と説き書に、詩言志歌永聲と説けるか如き、たぼろげなから先づ文藝に對する稱説、濫觴とするを得む。仲尼時に詩歌を説き、音樂を説き、夏殷周の典章を云々せざるにあらず、されど概ね三代文化大躰の特色をいふに止りて、未だ文藝の批判に及べるとなし。周末春秋より戰國に亘りて諸子百家競ひ起りて、雲蒸龍變の奇觀を呈し、互に辯難攻撃を逞う電、甲論乙駁、紛然結ばれて解けず、其間に荀卿の非十

二子篇の如き、莊周の天下篇の如き、主義理論の評議を爲せるものなきにしもあらずといへども、是等も單に學風上に於ける批判に止りて、文章修辭の事に觸るることなし。吾人か既に數々唱道せる如く、先秦時代に於ては、諸子百家か世を濟ひ時を救はむとするの餘、一家言を立て人を驚かさむとするの餘、識らず知らず筆墨を鼓蕩して此に文海萬丈の波瀾と捲起せしに過ぎず、文章の如きは單に方便のみ、偶然の結果のみ。事情既に斯の如し、文藝批判の起るに違あらざりしは固より當然のことに屬す。屈原か楚辭諸篇の如き、今よりして之を觀れば、詩的價値の千古に炳焉たるものありといへども、幽憤を美人香艸に寄せ、壹鬱を紅怨紫恨に托したるに外ならず。其眞に文藝家の態度を取りしは、其徒宋玉等に始りて、流風炎漢に入り、武帝時代に至りて詞客文人彬々として輩出し、雜を並へ轡を列ねて一時馳騁せり。敏疾の枚臯、淹遲の相如、詞人相互の間、まづ評議の筆に上るものあり。司馬遷史記を出すに及び、論贊の中、説文辭に及べるものあり。其他揚雄の如き、劉向の如き、往往指をこゝに染めしを見る。劉欽の作と稱せらるる西京雜記の中、前漢文人の個人評を雜ゆ。後漢及では班固か漢書、及び西都賦の序の如きを始めとし、文人の間には相互の批評を見ること、又は前漢に於けるが如し。之を要するに、兩漢は韻文散文に於ける形式の、漸く一定する時代也。韻文に於て五七言の形を成せし如き、賦、樂府、古詩の領域を明にせしか如き、散文に於て、論、檄、書、頌、贊、碑文、誄等の體を分ちしか如き、その最も的確なる現象なりといふべし。於て文藝進歩の過程に於て、兩漢はなほ創始期に屬せる者といふべく、漸く詩形文體が一定の範型を形づくりに止りて、未だ之に對して批判考察を爲すに至らず、漸く専門文士的態度を取る者出づ

しに止りて、未だ純然たる文藝批判家の態度を取る者を出すには至らざりし也。

魏は兩漢の文運を繼承し之を揮ふに鬱勃たる興國の霸氣を以てし、上に三曹あり、下に七子あり、建安の風骨雄勁さながら秋鶻の空を撃つに似て、煥乎たる文章、眞に一代の偉觀たりき。時は正に文運旺盛を極め、人は互に詞藻を以て相重せむとす、加ふるに兩漢に於ける各種文體整備の後を承け、專門文人輩出の餘に際せしかば、文藝批判の起るべき好機の熟したるは、蓋し偶然にあらざる也。果然典論てふ一篇は、騷壇の要求を充すべく現はれぬ。こは文帝即ち曹丕か作にて、當時の文豪、所謂建安七子の徒、孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、應瑒、劉楨が文技の長短を論斷して、頗る肯綮を穿てるもの也。かくて文士個人評を試みたる後、渠は斯道の爲めに萬丈の氣焰を吐露して、大膽にも文藝の不朽を唱へぬ。曰く、

蓋文章經國之大業。不朽之盛事。年壽有時而盡。榮樂止乎其身。二者必至之常期。未若文章之無窮。是以古之作者。寄身於翰墨。見意於篇籍。不假良史之辭。不託飛馳之勢。而聲名自傳於後。故西伯幽而演易。周且顯而制禮。不以隱約而弗務。不以康樂而加思。夫然則古人賤尺璧。而重寸陰。懼乎時之過已。而人多不強力。貧賤則懼於飢寒。富貴則流於逸樂。遂營目前之務。而遺千載之功。日月逝於上。體貌衰於下。忽然與萬物遷化。斯志士之大痛也。

年壽も有限也、榮樂も有限也ひとり文章は千古に傳はつて不朽也と。兎角に文藝を藐視して末技小藝となす支那に於て、此言論ある甚た珍とするに足る。且や文帝躬萬乗の貴きに居り、人生の榮樂に於て遂げ得べからざる所なし。古より放縱恣睢の帝王は酒池肉林は愚か、あらゆる世上の歡娛

と盡したるや、翻て不老不死といふか如き肉体的生活の延長を希求するか常也。然るに渠はかゝる肉体的生活と棄てて精神的生活の不朽を求めむとす、其志や大に多とすべき也、魏に於ては典論の外曹子建か與楊德祖書あり、同じく當代の文人を評隲せり。又七子の一人王粲に文質論の作あり。晋に至て陸機は文賦を歎ひぬ。剪裁緘縛を極めざるに非ず、而も誦して是るといふべき點なし、碎亂の謗を免れざる所以也。摯虞の文章流別は大に注意を値すべき者、古今の文章を撰ひ、類聚區分して三十卷となし、各集毎に文體と論して掲げたり。今の摯太常集に論辭のみあり。後世文體明辨の體裁は、全く之より來れる者なるべし。此外晋に於ては著作郎李充は翰林論三卷を著して文章の事を論せり、如上論し來りし如く、魏より晋に至る間に、文藝批判に關する論辭著作、相次いで出でたり、されど未だ吾人が依て以て支那古文學研鑽の典據とすべきものに逢着する能はざりき。時運の要求はいつか酬はれでは已まず、文華蔚然たる蕭梁に及で、斯道の傑著たる文心雕龍は禁掖の一官吏劉勰か手によりて世に現れぬ。此書古今を商推し、群籍を苞羅し、其修辭を論し、文體を説くに於て、博攷旁稽、盡さるるなし、眞に藝苑の至寶といふも誣言にあらざる也。かゝる名著の出でしも、畢竟、文運隆盛の餘孽なるとは、文學史家の忘却すべからざる所、歴代の帝王は皆熱心なる文藝の保護者たるのみならず、渠等自身、既に優秀なる作家たりき。武帝然り、文帝然り、元帝亦然り、晉幾多金玉の文字に滿てる詩文集を傳へしを見ば、思半に過ぎむ、就中、武帝の如き、最も斯文は熱心に御幸ある毎に群臣に命じて詩を賦せしめ、文善き者には金帛を賜ひて推獎し、又闕庭に至て詩頌を獻する者は、或は直に引見せられたりといふか如き、いかばかり當時の士民に、文藝の風尚を煽動

したりけむ。其他、吾人が最も記憶せざるべからざるは、昭明太子の人也。太子か名は又選の著者とし、隠れなき所、英明の天資を以て、一世の重望を負ひ、盛に詩文人を招致して、懸壇を耀炳したりしかば、當代の人心は翕然として此に歸向しぬ。看よ臺閣には沈約、江淹、任昉の如きを出し、野には劉孝標、陶弘景、陸倕、庾肩吾、吳均等の如きを出せしにあらすや。餘事はさて置き、吾人が茲、最も注意すべきは其文藝保護の賢太子か本論文の主人公たる劉勰に關係深きにて、劉勰は東宮舍人として太子の左右に奉侍し、親しくその警咳に接して、頗る寵遇を受たりてふ事實なりとす。されどもかゝる兩か個人の關係よりも更に一層多大なる注意を値すべきは、兩人か著書の文學上に於ける重要離るべからざる關係也。梁以前、製作を各文體の區分の下の配列したる文選と、梁以前の各文體の批判、及び修辭論とを以て成れる文心雕龍とを併せ觀る時は、梁以前の支那文學は、略、之を尋繹するを得べく、一は製作を主とし、他は談理に専らに、雙々相裨補して始めて完璧を見る。文選の後塵を逐へ者に、徐陵の玉臺新詠あり、雕龍と歩武を競はむと企てしものに、鐘嶸か詩品ありといへども、並に前二書に下ると唯數等のみにあらざる也。

### (二) 劉勰か傳紀と著作

劉勰か傳紀は頗る單純也、開歷の取り出でて記すべきものあるなし。渠は東莞莒の人にて、字を彦和といひ、父は越騎校尉たりきといふ。勰は幼にして孤なりきといへば、零丁の状態すべく家貧なるか爲に婚妻さへ思ふに任せざりきといへば、其の鎖尾のさま推して知るべし。沙門僧祐に依て居りしか、好學の志篤かりし爲、遂に博く經論に通じ、因て部類を區別して、之か序を作りぬ。定林

寺の職經は渠が定めし所なりといふ。梁の天監中に、東宮通事舍人を兼ねた。梁は佛教が隆盛を極めし時にて、武帝の如きは身を桑門に捨くしほとなりき。佛事人となりし勲は、七廟の饗薦已に蔬果を用ゆるに、二郊農社なは犠牲あるを見て、表を上りて二郊も宜しく七廟と同じく改むべきを言ひしか、子の陳する所、聽かれ歩兵校尉遷て、舍人を兼ねると故の如く深く昭明太子に愛接せられき。初め文心雕龍成るや、未だ時流の稱する所とならず、渠定を沈約に取らむと欲せしかど、自達するに由なかりき。乃ち書を負ひ約の車前候ふ、其狀貨鬻者の如し。約取て讀み、大に之を重じ謂らく、深く文理を得たりと、常に几案に陳して愛誦措かざりけり、勲佛理に長せしかは、都下の寺塔、及び名僧の碑誌は必ず渠の撰に成りき。教を受け、慧震沙門と定林寺に於て、經證を撰し、功畢て遂に出家を求め、先づ鬚髮を燔く自ら誓ひ、服を變して名を慧地と改めたりといふ。渠の著作として知らるるは文心雕龍の外、劉子てふ一書あり。論する所、一家言にして、唐の袁孝政之が注を作れり。翻刻本の序に、朝川善庵は劉勰か著たる事確實疑ふべからずと斷言せり。宛に角渠が文藝批評家としての一面を有する以外に思索家としての一面を有せしを知るべく、又佛理に長して遂に出家せしより見れば、更に渠は宗教家としての他の一面を有したりしと察すべし。はれと今吾人が考へむとするは文藝批評家としての一面にして、文心雕龍の一書に就て、其特色の實體を摘發せむとす。その詳細を究めて壺中の醍醐味を嘗めむとする篤志の士は、宜しく本書に就て精緻なる研讀を遂げよ。吾人は聊か之か前矛たるを甘するのみ。

渠の著(三)の文心雕龍の序に、勲は、佛理に長せしを察すべしと云ふ。

渠はいかにして文藝鑑辨の志を起せしか、請ふ渠か序志中に自白せる所に見ひ。

君子處世。樹德建言。豈好辯哉。不得已也。蚤生七齡。乃夢彩雲若錦則攀而採之。齒在踰立。則嘗夜執丹漆之禮器。隨仲尼而南行。且而寤。適怡然而喜。夫哉聖人之難見哉。乃小子之垂夢。歟。自生人以來。未有如夫子者也。敷讚聖旨。莫若注經。而馮鄭諸儒。宏之已精。就有深解。未足立家。唯文章之用。實經典枝條。五禮資之以成。六典困致用。君臣所以炳燦。軍國所以昭明。詳其本源。莫非經典。而去聖久遠。文體解散。辭人愛奇言。遺浮詭。飾羽尙畫。文繡鑿脫。離本彌甚。將遂訛濫。蓋周書論辭。貴乎體要。尼父陳訓。惡乎異端。辭訓之異。宜體於要。於是搦筆和墨。乃始論文。

と、大丈夫生れて此世に在り。豈に空しく朽木と朽つべひや、當に樹德建言、以て百代に名聲を傳ふべきのみとの功名心は、渠か胸裡に鬱勃たりた。偶然夢寢によりて刺戟せられ、大に悟る所あり遂に意を文藝批判に決しぬといふ由來、頗る凡ならざるを見る、渠は夢に仲尼に逢て敬慕の心愈深く、切に一功を聖門に立てむと思ひ、注經の事に當らむとせしも、既に馮鄭諸儒之が先を爲せるより、前人の未だ企てざる文章の研鑽に力を盡さむとせる也。顧みて從來ありふる文藝批判を見るに一も渠の意は滿つるものあらざりき。渠は典論を密而不周といひ、陳思か書を辨而無當といひ、應瑒か論を華而疏略といひ、陸機か賦を巧而碎亂といひ、文章流別を精而少巧といひ、翰林論を淺而寡要といひ、要するに皆葉を振て根を尋ぬる能はず、瀾を觀て源を索むる能はざるものど屬倒し、さて自ら一家の覓地を標榜して曰く、本乎道。歸乎聖。體乎經。酌乎緯。護乎韻。文之樞紐



亦云極矣と篇を分のごと四十九篇、序志を合せて都合五十篇あり、卷を分のごと十一より六に至る迄を上篇とし、七より十に至る迄を下篇とせり。上篇は渠か自ら綱目明矣といへるか如く、重に文體論を以て成り、下篇は渠か毛目顯矣といへる如く、重に修辭論を以て成り、此時代の著作としは存外に系統の立てるを推すべし。論述の方針に就ては、及其品列成文。有同乎舊談者。非雷同也。勢自不可異也。有異乎前論者。非苟異也理自不可同也。同之則異。不啻古今。擘肌分理。唯務折衷と其意の存する所、想見するに足る。其半生の心血を披瀝して斯道の研鑽に當り。之を以て不朽の傳をらむと期せしことは、序志の贊を見れば明也。曰く

益也。有涯。無涯惟智。逐物實難。憑性良易。傲岸泉石。咀嚼文義。文果載心。余心有寄。

渠城上篇の劈頭なる原道の一篇に於て、文即ち詞美をば自然現象より演繹し來れり。仰て望めば、圓月璧を曇で麗天の象垂れ、伏て見れば山川綺を煥して理地の形を鋪く、これ豈に自然の文にあらずや。人は性靈の鍾る所、天地と並で三才なり。五行の秀にして天地の心を受く、その文ある固より也。さて人に在ては心は一身の粹なり。心と外に發表するは言たり、故に言立ては文を爲す、自然の道なり、龍鳳の藻繪、虎豹の灼蔚、林籟の響を結び、泉石の韻を激する、皆自ら文を成す、かゝる無心の者すら、尙蔚然として彩あること斯の如し、況や靈妙不可思議の精神を有する人間に於て、文章の外に發表して燦然觀るべき者なかるべけんやと。第二篇、徵聖に於ては、人の最も秀出するものは聖人也、故に人は當に聖を師としてその文辭を學ぶべしとの意を言へり。第三篇、宗經に於て論するも、聖人の文辭を發表せるものを易、書、詩、禮、春秋の諸經とす。易は天を談して論、

説、辞、序の首を統べ、書は言を記して詔、策、章、奏の源を發し、詩は志と言ふて賦、頌、歌、讚の本を  
 立て、禮は體を立て銘、誅、箴、祝の端を統へ、春秋は理を辨して、紀、傳、銘、檄の根を爲す。されば  
 能く經を宗とすれば、一に情深くし、詭ならず、二に風清くして難ならず、三に事信にして誕なら  
 ず、四に義直くして回らず、五に體約にして蕪ならず、六に文麗にして淫ならずと。吾人か一見怪  
 訝の感をなすは第四章正緯に於て、かの迷信怪詭を以て成れる織緯の書を取れること也。されど先  
 つ緯書の偽たる四條を擧げ、桓譚、尹敏、張衡、荀悅の四子、既に其妄を辨せるをいひ、一轉して曰  
 く事豐奇偉、辞富膏腴、無益經典。而も助文章と斷言せらるを見れば、却て渠か文藝批判家として  
 頗慧眼を有せしを知るべき也。凡そ支那人の通癖として經典の旨を少しにても背戾する所あれば一  
 切峻拒して取らざるか常也。總か織緯の書か怪詭放誕と主する故、道徳に益なしといへども、事奇  
 に辞富む點よりすれば、文學上之を取るも差支なしとせるは、支那人として先づ卓見といはざるへ  
 からず。此思想にして一步を轉せむか、遂には支那人も空想を成れる小説戯曲の類を騷壇に容るゝ  
 の雅量を養ふべかりし也。第五篇辨駭に於て、渠か自ら主張せし論述の方針を決して吾人を欺かさ  
 るを見る。渠は淮南王安、王逸、宣帝、揚雄か離駭を以て經に方へと鑽せるをも、班固か傳に合す  
 るとて貶せるをも、孰れも未だ駭ならざる者とし更に一家の意見を出し、風雅に同じき四個の條件と  
 經典に異なる四個の條件を擧げ、漫に褒貶するの誤れるを闡明し、さく斷乎たる鐵案を下して、固  
 知楚辞者。體慢於三代。而風雅戰國。乃雅頌之博徒。而詞賦之英傑也。といへるか如き正に先人の  
 説に異なるも苟も異なるにあらず、同じき雷同にあらずとの宣言に吻合して、優に批評家としての

賦議を觀るに足る也。其他明詩、樂府、詮風以下皆有用の文字なれども、今は繁を厭ひて論せず。下篇に入つて神思一篇、インスピレーションを優麗絢爛の筆致もて論し、體性の篇に典雅、遠奥、精約、顯附、繁縟、壯麗、新奇、輕靡の八體を論し、情采の篇に文に形文、聲文、情文の三種あり、形文は五色これ也、聲文は五音これ也、情文は五性これ也、凡て内容たる情を本として外形たるを末とすへく、三百篇の詩人は情を本とし文を末とせるに、後世辭人に及ひて之に反して文を本とし情を末にせるの誤れるを辨せり、聲律、章句を論し、麗辭に入て對句の自然なるをいひ、對に言對、事對、反對、正對の四種あるをいひ、其優劣難易を斷せり。これ大に注意すべき所、四六駢麗體の盛行する時代に此論の生ずる自然の勢也。同時の沈約に四聲譜あり。かゝる音律句格の上に於ける研究はやかて唐代に入て律、排律の興起に資せしと少からざるべし。

終に臨て文心彫龍の文體を一考せむに、これ正に六朝の特色たる四六駢麗體也。采を鋪き文を擒るの妙、典を使ひ詞を描くの巧、網繆羅織、金を經とし翠を緯とし、こゝに一匹の錦繡人目を眩しむるに似たり。世に渠か四六體を取がしを難する者あれども、こは甚だ酷也。其著作を當世に法行せしむるには、勢、當時最も用ひらるゝ文體を選はざる可らず、加之のみならず、渠は四六奔騰の大渦中に立てる者、其弊害を痛切に感せしにあらざ、直截にいへば渠も亦決して時世の影響を免ふ能はざりし也。後世の文藝批評家の重なる者に就て視るも、皆各時勢の影響を脱却する能はざりしか如し。看よ嚴羽か滄浪詩話は禪を以て詩を説けるにあらすや、これ豈に勃々理屈佛理の人心入りし宋代學風の影響といふべからずや。又相應麟か詩數は博說旁論務めざるとせず、しかも特

の見るべきなし、これ豈に陽明學以外に他の特色一も存せざる明代學風の影響にあらずや。趙雲松か歐北詩話は頗る精緻なる考證を含めるを知らざや、これ豈に爬羅摘抉を主とせる清朝の考證的學風の影響にあらずといふへからざるか。何ぞ獨り劉勰か文飾を偏重せる六朝の流風に感染せるのみを尤めむや、吾人は唯文心雕龍をてふ一書か支那文學研鑽上に必須欠くへからざる聖權たるを唱道して己まむとするもの也。

〔完〕〔舊稿轉載〕

## 葉山の浦

梨雨

わが胸ひとつにはつゝみかねし此頃の思、誰に語り、誰にもらさん。思へば、はかなき浮世のさのふけんや。胸なる船も空く燃わて、なか／＼に身も心もいたすらに冷ひまざる夜半の寢覺のにかき味も覺ぬそめては、夜着の袖しはたれがちなり。かなしき思に堪へかねて、友の名を呼べど、あさましや、まばろしの名譽を追ひて、かへり見だもせず。われひとり花なき野邊にいたづらに。重き袖しぼりてためるふ思、誰か知る可き。

夕空にかめしく懸る虹の榮も一時か。若し血潮燃ゆる希望の光輝き渡るもまた、きの間か。夕闇せまり來ては、ここに彩雲影をどやめず、浮世の荒波押しよせては、希望も、よろこびもたゞひと時のまばるしにすぎざりけり。

ひと夜、葉山の浦に友の悲き戀物語さきて、袂拭ひつつも、をば慰めて、「あまき悲」ならぬ悲き